

塩酸セベラマーにより誘発される便秘についての検討

○門脇 大介<sup>1</sup>, 江崎 香菜子<sup>1</sup>, 濟川 聡美<sup>1</sup>, 石塚 洋一<sup>1</sup>, 入倉 充<sup>1</sup>,  
入江 徹美<sup>1</sup>, 平田 純生<sup>1</sup>(<sup>1</sup>熊本大院薬)

【目的】塩酸セベラマーは不溶性陰イオン交換樹脂であり、血液透析患者に対してリン吸着薬として用いられる。この塩酸セベラマーは便秘を誘発しやすく、重篤になると腸閉塞、腸管穿孔に至ることがある。このことは、透析患者におけるセベラマーのコンプライアンス低下に関連するため、セベラマーによる便秘の改善は透析患者の重要な課題となっている。そこで、今回ラットを用いて、セベラマーによる便秘誘発モデルの作成を試みた。

【方法】Wister 系雄性ラットを使用し、塩酸セベラマーまたは消化管運動抑制薬であるロペラミドを2日間前投与した後、1日間絶食を行った。絶食後セベラマーを再投与し、投与後1時間おきに18時間後までの排便を経時的に観察した。

【結果】塩酸セベラマー単独投与では排便に変化が観察されなかったため、ロペラミドを併用したところ、18時間後までの累積糞数において、塩酸セベラマー投与群は非投与群と比較して有意な低下を示した。また消化管通過時間について、塩酸セベラマー群では他群より有意に遅延した。

【考察】臨床現場において透析患者は便秘傾向であり、そのような透析患者のセベラマー服用は下剤の追加、増量を余儀なくされる。今回、ラットを用いた検討では、セベラマー単独では便秘が観察されなかった。しかしながら、ロペラミドとセベラマーを併用投与すると、セベラマーの用量依存的にロペラミド単独投与群と比較して便秘を悪化させることが明らかとなった。透析患者は便秘傾向であることを考慮すると、ロペラミド併用セベラマー誘発便秘モデルは、透析患者の状態をよく再現しており、今後、塩酸セベラマーによる便秘改善に向けた最適な下剤を探索する上で有用であることが示唆された。